BUNGEI OG NETWORK TSUSHIN

文芸OGネットワーク通信

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
共立女子大学文芸学部文芸学部長室内　文芸 OG ネットワーク
URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei
代表 川瀬 治子　発行 2024. 9. 20

vol.37

第17回 文芸サロン講座 開催

対面による総会が５年ぶりに開催され、総会終了後、文芸学部教授福嶋伸洋先生をお招きして、第 17 回文芸サロン講座が開催されました。出席者は 28 名。下村陽子さんに講座の概要をまとめていただきました。

2024 年６月８日（土）、５年ぶりに文芸サロン講座が開催された。会員年齢が高い文芸 OG ネットワークにとってコロナ禍による中断の影響は大きく、常連だった会員の何人もが状況の変化によって参加できなくなったことは残念だった。

講師は、中止になった 2020 年にお願いしていた福嶋伸洋先生に改めて依頼、快諾していただいた。先生はブラジルの文学と音楽の研究に始まり、ポピュラー音楽、ポップカルチャー、抒情詩、比較文学を研究対象にされている。

講座のテーマは「音楽と文学～ワークショップを通して～」。ワークショップというからには、参加型の講座になりそうだ。福嶋先生といえば、教師の話を一方的に聞く授業はしたくないとフィールドワークやインタビューなどの実践を取り入れた授業や、オープンキャンパスでのラップによる説明などの噂を聞いている。

授業では、英語の詩の「韻」のように日本語で「韻」が踏めますか？と問いかけ、ラップと韻の例をもって説明するなどの工夫をされているとのこと。ラップは面白そうだけれど果たしてついていけるのだろうか、少しの不安と緊張感そして大きな期待をもって参加者はようやく実現した講座に臨むことになった。

ワークショップでは、現役の学生はいざ知らずかつての学生にラップは無理……と思われたかどうかは分からないが、私達は「短歌」に取り組むことになった。

① 参加者は３人のグループに分かれる。
　グループ毎に三つのテーマが与えられる。
② 各テーマについて一人ずつ話（２分）をする。
　２分 ×3 テーマ ×3 人＝ 18 分。
③ その後、テーマを一つずつ分けてそれについて文章を書く。
④ テーマについて書いた文章を他のグループの書いたものと交換する。
⑤ グループ毎に一つのテーマを選んで、短歌（五七五七七）にまとめる。
⑥ 発表。

私達のグループのテーマは「春」「夏」「電車」。各テーマについて、時間を計りながら一人２分ずつ話をする。これといった話題が思い浮かばなければ２分でも時間を持て余すし、話したい内容が多ければ短く感じられる。３テーマについてこれを繰り返し、その後テーマを一つずつ分けてそれぞれ文章を書き、他グループのものと交換。ここからは共同作業で、全員が初心者だが、短歌とまではいかなくても選んだテーマ「誕生日」をなんとか五七五七七のリズムに乗せたいと真剣に取り組んだ。

テーマに関する文章と努力作は次の通り。

「七草がゆで誕生日のお祝い……グスン。夫は、生きてりゃくるさ誕生日！という男で、やっぱり誕生日のお祝いはなし。でもな～んにもこだわらない人で大好き」

誕生日　生きてりゃくるさ　という夫
ギフトなしでも　あなた大好き

参加者からは、「目から鱗の講座だった」「楽しかった」といった感想が寄せられた。学生時代に戻って今時の新しい授業に触れたような楽しい一時だった。

下村陽子（1971 卒）

参加者の質問にお答えになる福嶋伸洋先生

円形脱毛症

毎月美容院へ髪をカットに行く。そこで先月まではなかった円形脱毛症を美容師が発見。「ほんとだ、どうして！」と自分でもびっくりする。しかも３か所もある。大・中・小と。美容師は合わせ鏡で後ろを見せてくれる。この前はなかったのに…。そんなに急にできるものなのか。

この夏、夫の 40 日余りの入院、退院してからの我が家の暮らしは、大きく変わった。静かな２人暮らしから、急に毎日誰かが出入りするようになった。その煩わしいというか、あわただしいというか、落ち着かないことはなはだしい。それは夫の入浴の介助とか、その他医療関係の世話にそれぞれの人がやってくる。夫のことで来られるのだが、その都度私がすべて準備から後かたづけ迄かかわらざるを得ないわけだから、神経の休まる間がない。それが、知らず知らずのうちに負担になっていたのかと思う。

夫は元気だが、ただ尿管を付けているのが何より毎日の生活に大きな煩わしさをもたらす。先日も外す試みをやってみた。本当のところ本人もはっきりしないらしいが、2,3 日はなんとなく、無事に過ごしていたようだった。「よし！」。もうこれで外せた。その時２人とも思ってしまった。お互いにそう思ったから、それまで使っていたものすべてかたづけた。元の体制に戻してしまった。ダメだとわかった時のその落胆は大きかった。

寒くなると今までのようにシャワーというわけにはいかなくなる。そこで湯船へすっぽり入りたい。それがやれ滑るの、危険だのと、周りのひとは、手すりや滑り止めのマットを置かなくては危ないという。タイルも、滑るから、違うものに張り替えることを勧める。実際はすべて邪魔である。いざお風呂に入ってみると、全て自分でできる。プロのひとたちはそれぞれのマニュアルを持って、それに合わせてすすめたいようである。こんなことの葛藤もストレスになるのだろう。何も考えず、その日の予定がこなせれば今は「御の字」と思うことにしている。(2023 年 12 月記)

八木 佳代子 (1957 卒)

祖父 廣瀬勝平について

今からお話するのは、2004 年の IEA（国際エネルギー機関）コルシカ会議がニースに変更された時のことです。主人に同伴して、一人で美術館・博物館巡りを楽しむのが恒例になっていた私は、いつもの通り、マチス美術館に向かいました。ローマ時代に街の中心地だったシミエ地区の遺跡公園には、オリーヴやパラソル松・糸杉が繁り、その外れにマチス美術館があります。マチスのお墓はスロープをのぼった先にあり、ノエリア夫人との合葬墓でした。いいなあ！と感激し、手を合わせた私です。

北フランス生まれのマチスは、1917 年からニースに移り、この地で没しました。晩年はヴァンスの別荘で切り絵に専念し、ロザリオ礼拝堂の内部装飾にかかわっています。とりわけ私の目をひいたのは、目鼻のないのっぺらぼうの線描き僧で、日本の俳画を連想させました。

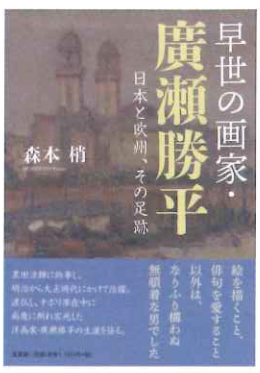
話かわって、東京美術学校（現在の東京芸術大学）洋画の一期生だった私の祖父は、ベルサイユ条約 * 締結時の日本代表だった西園寺公望侯らと同じ丹波丸で渡佛し、ゴッタ返したベルサイユ宮殿鏡の間控室に立ち会った一人でした。そのあと、パリのアトリエでマチスに逢い、海辺のスケッチを見せると、岩数を減らしたら…と、手で覆われた由、祖父がメモを残しています。その事をマチスの墓前で報告し、私はその時の孫ですと名乗り、改めて深いお辞儀をしました。…あれから 20 年が経ちました。

祖父はその後、旅先のナポリで臥し、帰らぬ人となって英国人墓地で永眠しています。あまりに早世だった祖父が哀れで、森下仁丹の広告デザインを手がけた事なども含め、私は一冊の本に纏めました。2023 年は私の 88 歳の節目の年で、母校の文芸学部創設 70 周年という、おめでたい重なりを、何とも嬉しく思ったものです。

齢 90 歳に手が届く今、グローバルに飛び廻った忘れ難い地をノートに纏め乍ら、私は心静かに日々を送る文芸２期生の一人です。もし、関心をお持ちの方がいらしたら、拙著『早世の画家・廣瀬勝平　日本と欧州、その足跡』(文芸社刊、2023 年) をお読み頂けたら光栄です。

森本　梢（1958 卒）

* ヴェルサイユ条約
第一次世界大戦終結時における連合国とドイツとの間で締結された講和条約。1919 年 6 月 28 日、フランスのヴェルサイユ宮殿鏡の間で調印されたので、こう呼ばれる。



早世の画家・廣瀬勝平
日本と欧州、その足跡
森本 梢 著
文芸社刊　2023 年

女性の自立と社会的地位向上をめざす建学精神のもと、創立138周年を迎えた共立女子学園。学び舎を巣立ったあと、仕事や家庭、地域など社会の様々なシーンで共立spiritを放っているOGを紹介していきます。

file 13 中谷比佐子

Hisako Nakatani (1959年卒)

着物ジャーナリスト・和文化継承者
株式会社 秋櫻舎 代表取締役

女性誌の編集者を経て、「着物が私をどう変えるか」というきっかけから着物生活50年。着物を切り口に日本の文化、日本人の考え方、美意識を学び、伝承している。農林水産省の審議委員として国産シルクブランドの開発に携わった経験から、日本の絹のすばらしさを伝える「シルク伝道師」としての活動も展開している。毎週水曜日20時からYouTubeにて<チャコちゅーぶ>を配信中。

――まずは、大学入学時の思い出から聞かせてください。

入学が決まって上京する際、大分県の出身ですので、当時、東京まで特急の寝台車で30時間近くかかりました。途中、山口県や関西の駅から東大や早慶に入学する御曹司たちが乗車してくるんです。彼らと車内でおしゃべりに花が咲き、その間に友達になったことも楽しい思い出ですね。

――大分から東京はかなり距離がありますけれど、共立女子大学を選んだ特別な理由はあったのですか？

これをやりたいというものが明確にあったわけではなく、とにかく数学がダメだったので(笑)国語と歴史、英語で受験ができて、放送芸術や舞台芸術が学べるのはおもしろそうだなと思って。しかも寮があると。学園長が鳩山薫子さんというのも親世代の信頼が高かったですね。東京は以前、両親が住んでいたこともあり、父親が弁護士だった関係で、仕事で頻繁に東京へ出かけていましたし、比較的自由な育てられ方をしていた家庭環境だったので、割とすんなり出てきちゃいました。

――どのような学生時代を過ごされたのですか。

とにかく毎日楽しかった思い出しかありません。授業は、文芸学部長の新関良三先生をはじめ、河竹登志夫先生、久保田万太郎先生など、超一流の方々から教えていただける贅沢な時間で、ほんとに楽しかったですね。全員で歌舞伎を観に行ったり、ちょうどテレビ放送の草創期でしたので、番組の制作過程をテレビ局で現場を見学させてもらったこともありました。現役のテレビプロデューサーが大学に来て、講義してくださることもあって、授業はどれもワクワクするものばかりで、さぼる人は誰もいなかったです。共立の学生からアナウンサーになる人やNHKの劇団に入った人もいました。

――授業以外の時間はどうでしたか？

当時、アルゼンチンタンゴが流行っていたので、学校が終わるとみんなで近くの喫茶店に行って、コーヒーを飲みながら蓄音機でタンゴを聞いたり、社交ダンスも盛んでした。入学当初はとりあえず、大分弁を直したかったので放送部に入り、アナウンスのトレーニングをしました。それもTBSのアナウンサーが来てくださり、発声のしかたやマイクの使い方を教えてくれるという本格的なもので。放送部の先輩はきれいな方が多くて、実際にコマーシャル出演をしたり、今でいうタレントのようなことをしている先輩もいました。

――お聞きしているだけで、ワクワクします。楽しい学生時代を経て、卒業後の進路は？

講談社に受かっていたのですが、あるきっかけから雑誌『女性自身』の編集部で働くことになりました。というのは、知り合いの知り合いのカメラマンから、当時できたばかりの伊勢丹のエスカレーターを撮影したいので私たち数名(共立の同級生)にモデルになってくれないかと頼まれまして。撮影自体は仲間数名でずらっとエスカレーターに並んで無事に終わりましたが、その流れで私は『女性自身』の編集部に入ることになりました。

――編集部ではどのようなお仕事をされたのですか。

『女性自身』の創刊が昭和33年12月で、私の卒業が34年3月ですから、創刊からまもなくの時期から携わっていました。創刊時はアメリカの『Seventeen』と提携したファッション誌で、最初の頃は表紙の写真を選ぶ役割でした。その後、広告ページの企画で美容家の大関早苗さんやファッションデザイナーの大内順子さんとご一緒させていただいたり、松本清張さんの小説執筆のためのリサーチ取材、売春防止法に関わる取材では市川房枝さんや、当時売春街だった新宿二丁目の娼婦にも話を聞きに行きました。仕事は刺激的で楽しかったのですが、徹夜も当たり前の時代でしたから、体を壊してしまい、一旦、仕事から離れ、専業主婦をしていた時期もありました。

――着物との出会い、また仕事に対する思いなどを聞かせてください。

その後、別の雑誌に移り、草木染めの命名者である山崎斌氏との運命的な出会いがあり、そこから着物の世界に入っていきました。ここまで深く着物と関われたのは、『女性自身』で鍛えられたからで、あの時代は前哨戦だったと思っています。それがなかったら、作る人たちや素材に目を向け、追求していたかどうか…。さらに辿れば、共立での学びは大きかったと感じます。独創的な授業を通して自由に学ばせてもらい、感性や発想力を養ってもらったのだなと。編集部に就職した当時、学生時代にやってきたことがすべて活かされている！と実感したことを覚えています。

最近、イベントや講演会などで共立の後輩の方々から声をかけていただくことがあります。嬉しいものですね。

――貴重なお話をありがとうございました。

聞き手　高橋京子(1989卒)

Kyoritsu Spirit!

連載 私の学生時代 ―文芸学部で学んだ日々㉓―

my school days

今回は第11期生の鈴木美恵子さんに書いていただきました。

大学入試は早稲田、明治、共立を受験して3校とも合格しましたが、迷うことなく共立を選びました。

入試の出題の仕方が気に入ったからです。他の大学は○×式と3択問題でしたから、入学後のマンモス授業も想像できました。しかし共立の設問は全く違いすべて記述式でした。

日本史は鎌倉時代の事が問われ、答を書き始めるとぐんぐん筆が進み欄外にまで書いてしまいました。国語と英語も文章問題。自由に書けるように広い解答欄が用意されていました。答案を提出した時、私は自信を持って「この大学で学ぼう」と思ったのです。

予想に違うことなく共立は豊かな4年間を私に与えてくれました。

教授陣は新関良三先生、福原麟太郎先生とその薫陶を受けた若手の先生方。教室は少人数で自由な空気が流れていました。英文学の古典シェイクスピアやチャールズ・ラムの随筆、ワーズワースの詩。米文学はフォークナーやテネシー・ウィリアムズ等を知り、新しく学ぶ事に心踊りました。英文コース以外の講座を履修できる事も魅力でした。河竹登志夫先生の古典芸能や安藤鶴夫先生の演劇論。山田智三郎先生の西洋美術史など。わくわくする程楽しい授業でした。

部活は山岳部に入りました。夏は南北アルプス縦走、冬はスキー合宿。アクティブな先輩方に恵まれて自然を愛でる心が養われたと思います。

狂言研究会にも属し、部長を任されました。和泉流狂言方の野村万作師の指導の元に、大学祭には共立講堂で「くさびら」「業平餅」「二人袴」「若葉」を演じたのも懐かしい思い出です。

4年生になり朱牟田房子先生に新聞社か出版社で仕事をしたいと相談したところ、布川角左衛門先生が主催する岩波書店のエディタースクール（夜学）を勧めて下さり、ここで編集の基礎を学びました。

丁度、運良く朱牟田先生に卒業生から「育児休職するので出版社を希望する学生を紹介して欲しい」旨の依頼があり、先生は私を推薦して下さいました。

フレーベル館の編集部。児童図書の老舗です。試験に合格して私は入社が決まりました。

鈴木美恵子（1967卒）

2024年度総会 報告

2024年6月8日（土）に、2019年以来となる対面での総会とサロン講座を共立女子大学本館204号室で開く事ができました。総会の出席者は23名、サロン講座は28名でした。見知ったお顔に出会える貴重さを、コロナ禍で行動を控えていた為に改めて強く感じました。

総会に向けて、2023年度の会計収支決算報告と、2024年度予算案の賛否を返信して頂きました。116名に連絡し、その返答の結果、返信ハガキが73名。その内71名から両案共承認の答えを頂きました。他2名の方は賛否どちらにも無記入でしたので不明です。よって両案共に承認された事をご報告します。ご協力有難うございました。

今後については、残金のある限り、「文芸ＯＧネットワーク通信」の制作と発送、および「文藝学部報」はお送りするつもりです。又、演劇資料室での活動は、毎週火曜日午後（夏、冬、春休み除く）に継続して行う予定です。以上ご報告いたします。

文芸OGネットワーク代表　川瀬治子

広場

＊仙葉弘子さん（1958卒）は2024年7月、「陶研展―こだわりの自主陶芸、共通テーマ『焼き戻し』」（主催・陶研究会、横浜の「リリスギャラリーA」にて）に出品されました。

＊佐藤和代さん（1966卒）は2024年5月、『天のかけはし－倭国の源流タニハ－』（古代丹波歴史研究所10周年記念誌）に「垂仁天皇は何故丹波の皇后を迎えたか？」を寄稿されました。

＊山崎裕子さん（1977卒）は2024年4月、「絵になるTOKYO! 展～街と人を描く～」（主催・永沢モンパルナス、東京交通会館ギャラリー・パールルームにて）に透明水彩画を、6月には「全国近代こけし展」（主催・日本こけし工芸会、日本橋小津ギャラリーにて）に創作こけしを出品されました。

編集後記

EDITOR'S NOTE

元日の能登半島地震、大雨や猛暑、次々にやって来る台風など、改めて自然の脅威、災害の多さに気づかされます。被害に遭われた方々に心よりお見舞いを申し上げます。◆5年ぶりに対面でおこなわれた今年度の総会、文芸サロン講座の様子を、ご出席になれなかった方々にも紙面でお伝えします。◆インタビューをはじめ、原稿をお寄せくださった方々の文章からは、さまざまな出会いと困難にしなやかに対処なさってきたことがうかがえます。会員同士の交流を願いつつ、ご意見、ご投稿をお待ちしています。(K)